

問題を「治承物語」に戻すと、資長に中風を齎したのは「盧舎那焼タル大政入道ノ方人」した為とされていた（諸本通して）。ここには、明らかに東大寺を焼いたことに対する仏罰が認められる。圧倒的に見えた平家友軍も、冥罰によってたちまちに崩壊していくのである。「治承物語」はここ、清盛死後の平家の敗北まで語っていたのではあるまいか。それは、残された一門、更に、その方人にまで仮借ない責めを与えるものだったのであろう。しかし、先走って言えば、そうだったからこゝろ、滅び行く一門の美しさが、つまり、『平家物語』への変質が生じたのではあるまいか。

#### 四

「治承物語」の作者は、東大寺の大仏の靈力を信じ、且つ、清盛の死に様や資長の死に様をそれに結び付け得た人物であつたろう。

高倉宮以仁王が逃げこんだ園城寺から合力を求める牒状が来た時、興福寺の返牒を執筆したと記されている覚明は、清盛を「平氏之糟糠武家之塵芥」と貶し、激しい敵意を表している。従って、平家軍による南都の焼き討ちには許し難い恨みを抱き、強く仏罰を願ったことは想像に難くない。しかも、彼は後に、平家を都から追い落とす義仲の手に属してもいる。「治承物語」の作者としてはこの大天房覚明がふさわしいと考えるのであるがいかがであらうか。

(注一) 『香椎湯』第二十六号(昭和五十六年三月)

(注二) 『人文』第六号(昭和五十七年七月)

(注三) 『平重衡と女性たち(下)』(『防衛大学校紀要』昭和五十六年三月)

(注四) 『源平盛衰記の性格』(『平家物語新考』昭和五十七年十二月)

(注五) 富倉徳次郎『平家物語全注釈 中巻』(昭和四十二年五月)の「横田河

原合戦」の解説などに同様の見解がある。

「治承物語」をめぐる試考(橋口)

本稿は、補訂、改稿を行うことになったので、『鹿児島県立短期大学紀要』に投じることにした。二年間を経過して、且つ、釣り合いのとれない論となってしまったことをおわびしたい。

ナシ  
×××  
×××

（第三十九 秀衡資長等二可追討源氏由事）

『平家物語』で資長が初めて登場するのは「木曾義仲成長スル事」の章段（延慶本）で、旗揚げした義仲に対して、平家の侍共（覚一本だけ清盛とする）が「何事カ候ヘキ 越後国城太郎資長兄弟多勢者也 木曾義仲信乃国ノ兵ヲ語トモ十分一二モ不可及 只今ニ誅テ獻リナムス」という話をするところである。これによれば、平家にとって頼もしい人物、義仲にとって恐れ相手ということになる。その資長の呆気ない死去が記されるのがこの部分である。しかも、その冒頭で、先の頼もしい評判が改めてその系図から説き出されていて（源平盛衰記・覚一本は後記のようにやや異なる）、この部分の義仲対策の意外な挫折への関心を露わにしている。

まず、諸本間の異同を簡単に纏めて置きたい。資長の越後守任命の聞書到着のところは、延慶本・長門本では注進状の一部といった文体で始まるが、ここ全体をその注進状としているのが源平盛衰記である。資長の怪死は注進として告げられたのであろうが、源平盛衰記が本来のかたちを残しているとは必ずしも言えない。猶お、四部合戦状本は越後守任命を全く記さず、覚一本は文体を完全に改めている。

資長の死様に四部合戦状本は全く触れないが、延慶本・長門本・源平盛衰記は体の自由を奪われた様を詳しく述べ、覚一本はその唐突さを強調している。又、源平盛衰記は、体の自由を奪われた様を比較的小略しながら記した後に、「悶絶僻地して周章死に」死んだと、清盛の場合と全く同じ表現を用いているのが注目される。前稿（一）の第二章（四）でも清盛の死に準じた表現をしていることを指摘したが、源平

盛衰記は「伽藍ノ討」——「治承物語」を一本の筋として生かそうと試みたことがあったのであろうか。

猶お、源平盛衰記と覚一本では、次のように月日等が異なっている。まず、源平盛衰記では、二月十九日の条には、宣旨が資永・秀衡に下されたという独自の記事が置かれ（表では省かれている）、他本と共通する記事は四月二十八日の条に配されている。源平盛衰記がこのようにした根拠については詳にし得ない。又、この二十八日の直後に、六月二十五日の横田川原の合戦における城氏（資永）の敗北が記され、その後、九月二十日の条に永茂からの注進状として、資永の除目聞書の到来から死までが告げられている。完敗をした資永に今更仏罰もないものだが、このところの源平盛衰記の月日は『吾妻鏡』の、八月十三日追討の命宣下、九月三日資永急死 という日付けの影響を受けたものであろう。資永が九月三日に死ぬのなら、六月十三、十四日（『玉葉』による）の城氏の敗北が、資永のこととして記されるのも無理はない。

次に、覚一本では、二月一日に助長が越後守に任じられたとし、又、彼の死を六月十六日とする。その外、助永の急死前後の天候、経過等に詳しい。右の覚一本の日付けの根拠も詳にし難い。

ここで、『吾妻鏡』以外の資料に目を通して置こう。

助永に義仲追討の命が下ったことは、『玉葉』の治承四年十二月三日の条に「越後城太郎助永於甲斐信濃兩國者不交他人一身可攻落之由令申請云々」とあるので、これ以前のことと考えられる（ただし、義仲の名前はない）。又、助永の死も、同じ『玉葉』の治承五年三月十七日の条に「越後城太郎助永病死了云々」とあり、『吉記』の治承五年六月二十七日の資職の割注に「資永去春逝去」とあるので、治承五年の春、三月十七日以前のことと考えられる（注九）。延慶本・長門本・四部合戦状本は、ほぼこの日時に沿っていると言えよう。

らんずるにやすう打てまいらせんずとの給ければ（中略） × × × × × × × × × × × × × × × ×

× × × × × × × × × × × × × × × ×

並スル層之感勢重クシテ

× × × × × × × × × × × × × × × ×

[illegible]

越後 越後國の住人城太郎

×  
×  
任×  
する×  
×  
さ×  
×  
に×  
振ル多勢超信濃國へ  
木曾  
  
セ  
ン  
ト  
×  
欲×  
前×  
日×  
夜

○

計  
×  
都合二  
万 ×  
×  
同六月十五日出てある十六日の別冊にすてうた、んとしけるに夜半ばかり俄に大風吹大雨くだり雷おびた、し

なて大響で後  
空 ××  
井 ××

大なる聲のしはがれたるをもて  
南閣浮提 ××××

大佛彫  
 金銅十六丈  
 平家  
 ほろぼしたてまつる  
 有ヤヲ  
 こ、にあり

[illegible]

議  
之  
科  
そろしひ天の告の候にたゞ理をまげてとゞまらせ給へ  
と申けれ共  
弓矢とる物のそれによるべき様なし  
とてあくる十六日卯刻

に城をいでてわづかに十余町ぞゆいたりける 黒雲一むら立来て助長がうへにおほふとこそ見えけれ  
 俄に

× ×  
 × × ×  
 × × ×  
 × × ×  
 心 ×  
 ほ ×  
 れ ×  
 て ×  
 落 ×  
 馬 ×  
 し ×  
 て ×  
 け ×  
 り ×  
 ×  
 奥 ×  
 に ×  
 か ×  
 き ×  
 の ×  
 せ ×  
 館 ×  
 へ ×  
 歸 ×  
 り ×  
 × ×  
 × ×

[illegible]

× ×  
× ×  
× ×  
× ×  
× ×  
× ×  
× ×  
× ×  
× ×  
う二  
ち月  
ふ廿  
す五  
事日  
三×  
時×  
ば×  
かり  
して  
遂×  
に×  
死×  
に×  
け×  
り×  
× ×  
× ×  
× ×

ふるひ死てハかはねを南都にさらす ましてならくのたき、のそこおもひやるこそむさんなれ」となっている外、大納言典侍の「さしもつミふかき人なれハ後のよをとふらは、やと思ひ侍り 衆徒をなため仰られて頸を返し給て孝養せん」という言葉が加えられ、又、重源について「黒谷法然坊の弟子なり」という説明が加えられている。注目されることは「ならくのたき、のそこ」という表現が、清盛と同様に焦熱地獄におちることを示していて、「南都より出たり」という注記のころの重衡の救済ということと矛盾することである。筆者は、長門本と源平盛衰記は近いと考えているので、この矛盾は、源平盛衰記が本来のものを異説として退け、「南都より出たり」というものを採用した為に起こったものと考えている。覚一本は、以上の非当道系諸本に比べると極めて簡略である。先述のように、頸が釘付けにされたことは前に記して強調しているのであるが、表現から見ると、長門本・源平盛衰記に近いようである。しかも、「般若寺大鳥居のまへに」釘付けにしたというのは、長門本・源平盛衰記の二つの文を強引に接いで縮めたという風である。又、最後が「北方もさまをかへかの後世菩提をとぶらはれけるこそ哀なれ」となっているのは、先述の女語りと対応していると言えないであろうか。

以上、筆者は、延慶本を軸にして、平重衡が「金銅十六丈ノ廬舎那仏焼奉タル伽藍冥討」に関して描かれているところを、七箇所に見て取り上げ、考察して来た。その結果、重衡が一の谷で生捕りにされて、鎌倉や京都を引き廻され、死んでもその首が奈良を引き廻されて晒し物にされたことを「南都ヲ滅シ給ヌル罪ノ報」として描いていることが認められた（しかし、延慶本では、重衡に関して「金銅十六丈ノ廬舎那仏焼奉タル」罪と限定されている例は<sup>(イ)</sup>ただであった）。

一方、清盛の場合は、摂関家に対する悪行から始まって、上皇への

悪行、毘廬遮那仏への悪行と広がり、重なつて行き、その到達した報いとして彼の「アツチ死」が描かれたのだが、重衡の場合は、実際に手を下したものの「云王宣父命ト申随世道難遁シテ」ということが一方で添えられていて、運の悪さのようなものが付き纏っていることも拒めない。

清盛との質の違いということで、筆者は、重衡に関るところを「治承物語」からの発展と考えてみたのであるが、このところには、<sup>(イ)</sup>で考察したように、もう一つの「灌頂巻」とも見られる要素もあった。

「法然義」の問題は筆者の手に余るものであるが、一連の重衡譚が『平家物語』への発展の一段階であったことを考え、又、そこに重衡の救いが描かれたことを「治承物語」の変質とみるのは相当の根拠を持っていないであろうか。

### 三

前節で、筆者は、「治承物語」から『平家物語』への変質の過程（必然性）を「伽藍ノ討」の継続、重衡の救済の設定という方向で考えてみた。

話が前後することになったが、重衡への発展が変質そのものであったとすると、「治承物語」——「伽藍ノ討」の認められる最後はどこであろうか。管見で、その最後として認められる例は、次の城資長の死の場面である。

(長) 十九日越後 城太郎平資長ト云者アリ 是ハ余五  
(盛) 同 × × × 國住人に 後ハ資水と改名す × ×  
(四) 同 × × × 國には餘五將軍の末葉城太郎助長同四郎助茂これらは兄弟ともに多勢のもの共なり 仰ぐだした  
(寛) × × ×

処刑される者の作法を記したところではないかという気がしてくる。重衡は抜かりない死に様を心掛けて、気を張っているのであろうか。砂川氏の論にもある頼朝の政、一旦はその虐政を咎めんとしたが、しかし、平家にも苛政はあった。従って、因果の理と諦めた重衡ではあるが、「てきを敵へわたす」行為はいかにみても道に反する。頼朝への恨みは呪いのような断言となって口を突いたのだと筆者は受け取る。重衡の厳しい批判を受けた頼朝の臣、実平は、後白河上皇の指図であることを述べて主への鋒先を和らげ、なぜ鎌倉で自殺しなかったかと逆に重衡を責める。重衡は、「怖悲しと思て」胸中の仏を害するに忍びなかったのだと答えて、妄念の起こらぬよう、不意に打てと命じる。それから、教化引導の場に転じるのだが、僧に対しての重衡の懺悔は頼るべき何物もない自分を投げ出すことになっている。南都滅亡の罪を自分に引き受けるあたりは、実平に対した時の重衡とは別人の如くである。懺悔とはかかるものであるべきなのであろう。僧の教化引導が続いて記される。阿弥陀経一卷・懺法一卷・法華経一部、ここで戒を授ける、「西方極楽を歎ひ」、弥陀の名号を口に唱え、心に念ずること、又、地藏の悲願を仰ぐこと、そして、布施が渡されて、又読経が繰り返される。源平盛衰記の重衡処刑が、処刑の儀式書きであり、且つ、往生の手順を辿ったものだったことは間違いないまい。

猶お、日蓮遺文には、「四男重衡は其身に縄をつけて京かまくらを引かへし 結句なら七大寺にわたされて 十万人の大衆等我等が仏のかたきなりとて一刀づつきざみぬ」とあって、『平家物語』と全く異なる重衡の刑が伝えられている。

(E 重衡の体が日野で茶毗にされたこと)

延慶本では、信時達が重衡の遺体を輿で日野に運んだ、北の方は遺体に抱き付いて泣き悲しんだが、その夜茶毗に附し、骨を高野へ送った となっている。長門本も同内容であるが、「あをたにかきて」運

んだとする等、小異がある。源平盛衰記も同内容のものを記しているが、その前に、僧の目を通して処刑直後の光景が描かれる。教化引導の場から処刑までは、それに立ち合った僧の語りとして源平盛衰記に採りあげられたのかもしれない。

以上の非当道系諸本に対して、覚一本は、重衡の首の処置を記してから、このところを記す。そこも、北の方が遺体が捨て置かれることを推察して迎えを遣るとか、暑い比だったので遺体が変わり果ていたとか、法界寺でしかるべき僧達に供養させたとか 全く異なっている。覚一本は、北の方に寄り添った位置から語られているようで、女語りが背後に想像されるように思う。

F 重衡の首の行方

延慶本では、大衆に渡され、大垣を三度引廻された後、法華寺の鳥居の前で鉾に貫かれ、般若寺の大卒塔婆に釘付けにされた、しかし、一週間後、北の方が俊乗房重源に頼んで乞い請け、高野へ送った となっている。長門本も大体同じ文章であるが、法華寺の鳥居の前で鉾に貫かれたことについて「治承のかせんの時こゝに打立て南都をほろぼしたりし者とて」という説明が入り、頸が釘付けにされたことについて「大仏をやき給ハすハ今日かゝるめに相給へしやと申て泪をなかしける人もおほかりけり」という人の評言が入り、最後に「つら／＼事の心をあむするに重衡卿槐門王棲の家二生といへ共神明仏陀の加護もなく冥顕につけてハこと／＼く仁儀礼智信の法に背給けるとそおほえける」という編著者の重衡評が加えられている。延慶本に比べると、重衡の神明仏陀（大仏）に対する罪深さが強調されていると言えよう。又、編著者が儒教の徳目を並べているのも注目される。この長門本に近いのが源平盛衰記である。ただし、源平盛衰記では、最後の編著者の重衡評にあたるところが、「めつはうし月支東漸の仏教をやきうしなふ日域南北之霊陽、故冥衆不祐其人神祇成崇其身 生てハ恥を東國に

時の登場によって最後の場面がみるみるうちに整えられて行くが、知時が自らの括りを差し出す等、覚一本は、侍の世話焼き振りを他本に比べて強めていると言えそうである。又、覚一本では、仏を求めなければ済まない、重衡の罪深さの意識が印象的である。

（D）重衡が阿弥陀に往生を願い、十念を唱えながら処刑されるところ）

延慶本では、重衡が、提婆達多の例や第十八の願を挙げて引接を乞い、十念を唱える、その声も未だ終わらないうちに頸が落ちる、信時は頭を地に付けて叫び、見物の人で涙を流さない者はなかった となっている。長門本もほぼ同文であるが、第十八願を挙げるところだけが「一念十念をえらハす極楽浄土の地へす、め入むとちかいをハします」となっていて、経文を引く延慶本と大きく異なる。長門本のもは、「乃至十念」を中心に第十八願の主旨を分かりやすく説いたものと考えられるので、享受者を考慮して改めたものかもしれない。延慶本・長門本に対して、覚一本は、同じく提婆達多の例から始めるのであるが、「三逆をつくり八万の聖教をほろぼしたりし」と、「八万の聖教をほろぼし」たことが特に引き出されて、重衡との近さが強調されている。ここから、覚一本は、延慶本・長門本を離れて、「聖教に値遇せし逆縁くちずして得道の国ともなる」という思想に沿って、重衡の願いが口説かれて行くことになる。彼は、まず、前稿(一)の第二章(ハ)の箇所で釈明したのと同じことを繰り返し、身に迫った斬刑をその報いと受け取っていることを述べる。「後悔千万かなしんでもあまりあり」。しかし、彼が思い起こすのは「唯縁樂意 逆即是順」という経文であり、「一念弥陀佛 即滅無量罪」ということである。覚一本の重衡は、「後悔千万かなしんでもあまりあり」とのことであるが、自らの意志で南都を焼いたのではないという自信のようなものがあり（それゆえに、運の悪い、下品の者ということになる）、「三寶の境

界」や「済度の良縁」に縋って「九品託生」を遂げるのだという強い意志があらわれて（「高聲に十念唱へつつ頸をのべてきらせ」たとある）、からつとしてるように思われる。源平盛衰記については、前項Cのところから後回しにして来たが、ここについては、砂川博氏に次のような詳しい解説がある。<sup>(注四)</sup>

南都では処刑の直前土肥次郎実平に頼朝の政治の是非を質してこれを悪攻と決めつけ、「頼朝も弥勒の代をばよも持たじ、今日は人の上と思へども、明日は必ず身の上を思ふべし」と、前途の滅亡を断言している。のみならず、自身を顧みて、

重衡が罪深き者と云ふなれども、全く罪深からず。心より発りて南都を亡したらば、西海の波の底にも沈み、東路の頭に骸をも曝すべけれども、法相三論の学地の辺、華嚴法華修行の砌、仏法流布の境、奈良の都に廻り来て、切られて其後、首を東大興福の両寺に渡されん事、大乘値遇の過去の縁浅からずと思へば罪深かる可しとも覚えず、

といい放つなど、剛直な姿を示している。もとより、かかる重衡像の彫琢は諸本にはなく、盛衰記の重衡に対する思いが如何なる質のものであったかがよくわかる。

だが一連の重衡譚の加筆潤色の中で最も注目を要するのは、処刑の庭に「歳六十余の僧」を登場させ、教化引導の場を構成する所である。その教導により、重衡が後戸の縁を行道していると、紫雲が一筋浮んだという。紫雲が往生の奇瑞を示すものであれば、ここに重衡の救済が確認されたことになる（巻四十五内大臣京上り附重衡南都に向ひ斬る並大地震の事）。

蛇足ながら、いささか私見を記して置く。

重衡が処刑された古堂の位置、沐浴の行儀、夕食の取り方の詳しい描写で、この部分は始まる。夕食の取り方など読んでみると、ここは

槐門王樓の家二生といへ共神明佛陀の加護もなく冥顯につけて  
ハこと／＼く仁儀礼智信の法に背給けるとそおほえける」アリ

(長)

(注) 四部合戦状本にはこの章段がない。

右の箇所を六つの部分にわけて考察を加えたい。

A、南都の僧達の評議が始まるまで

延慶本・長門本では、重衡南都下向の噂を聞いて、僧達の評議が始まることになっているが、源平盛衰記では、「いつミの小津」から土肥実平が寺内に入れて良いのか否かを問いあわせたので、それを受けて評議が始まることになっている。又、覚一本は、重衡を受け取って評議を始めるので、これに相当するところはない。

B、僧達の評議の経過と結論

延慶本では、衆徒が東大寺・興福寺の大垣を三度廻して鬬り殺しにしようと言いつつ、宿老が南都に攻めて来た時討ち取ること出来ず、今、武士の手から受け取ってそのように鬬り殺しにしようのも道理が立たないから、武士の手に掛けてもらって首だけを受け取り、奈良坂に曝そうということに一致したので、衆徒も同じで、般若路に入らず斬られたい、その首を貰いたい旨の使者を立てたとなっている。長門本は、右の衆徒の評議の冒頭に、重衡は大悪人で、並の刑では到底及ばないという意味の言葉が付くだけで、それから後は、延慶本にほぼ一致する。猶お、長門本のこの増補部は覚一本にほぼ一致しているので、覚一本など語り本の影響を受けたものかと考えられる。源平盛衰記も、延慶本に対する関係では、長門本と変わらな

い。ただ、その冒頭の評議の言葉が「天竺震旦の法滅はしはらくさしをく」以下 対句を含んだ漢文脈になっただけのことである。この冒頭部の、欽明天皇の時代に仏法が渡来して、物部守屋がそれを排そう

としたが、聖徳太子に滅ぼされたという一条は「佛法破滅」の章段にも同内容のものがある。『古今著聞集』第二の「欽明天皇十三年に百濟國より佛教傳來の事」「聖徳太子物部守屋等を滅して佛法を弘め給ふ事」の連続した二章段には、聖徳太子を救世觀世音の垂跡とすることを初めとして、ほぼ同内容のことが出て来るので、源平盛衰記の右の部分は、『古今著聞集』のようなものを継承しているであろう。覚一本は、先に指摘したように、衆徒の評議の部分は長門本にほぼ一致している。ところが、老僧の意見を記したところで、非当道系本にある重衡を自らの手で捕えることが出来なかったというひけめに關する部分がそっくり落ちている。この省略の為に、覚一本では、老僧は、衆徒と対照的に、殺生などしたくないと考えているように見える。

(C 重衡が信時に仏像を持ってこさせるところ)

省略しているが、延慶本では、使者の口上を聞いた武士が木津川端で切ろうとすると、重衡が最期を悟って、信時に仏はいないかと問う、信時が駆け廻って阿弥陀三尊を探し出して来ると、重衡は悦んで、それを東向に立て、括りを解いて仏の手に結び付けるとなっている。長門本もほぼ同内容であるが、重衡に敬語を使ったり、送りの武士として頼兼を描き出したり、朝時(とする)について重衡の頼みを聞いて涙に暮れたり、仏を持って来て川原に据えたとする(延慶本では、「中将悦テ」という言葉が這入っている)ので、重衡の意向と受け取られる(等で詳しくかつたりという風に異なる。源平盛衰記だけは、大きく異なるので、次項にまとめて記すことにする。覚一本では、数千人の大衆が処刑を見に集まるところに、八条女院の許にいた知時が最期を見に駆けつける、人垣を掻き分けて重衡に申し出ると、重衡は余りに罪深く覚えるので仏を拝みながら斬られたいと告げる、そこで知時は武士と相談し、阿弥陀一体を運んで来る、知時は狩衣の括りを解いて仏の手にかけ、一方を重衡に握らせる)となっている、侍、知

事た、今にきはまれり (以下略) (盛)・般若路より内へ  
ハ入ましく候 いくくにてもきられ候へし からの御敵にて  
候へハ首をハ請取候へし とぞ申ける (長)・(以上略) い  
ま重衡が逆罪をおかす事またく愚意の發起にあらず 只世に隨  
ふことはりを存斗也 命をたもつ物誰か王命を蔑如する 生を  
うる物誰か父の命をそむかん かれといひ是といひ辞するに  
所なし 理非佛陀の照覽にあり (以下略) (覚) ②③重衡  
卿のくひをは (盛)・三位中将頸 (長)・ナシ (覚) ②④「頼  
兼真平」アリ (盛)・「武士」アリ (長) ②⑤大衆の中へわた  
したりければ衆徒これをうけとりて東大寺興福寺の大かき三度  
めくらし法花寺の鳥井のまへに棹につらぬきたかくさしあけて  
これをさらす 治承の合戦の時こゝに打たち南都をほろぼした  
れはとてなり その、ち般若野の道のはたに大そとはをたて、  
はつ付にしてこれをさらす (盛)・南都の大衆中へをくりけれ  
ハ大衆請取て東大寺興福寺の大垣を三度めくらし法花寺の鳥  
居の前にて治承のかせんの時こゝに打立て南都をほろぼしたり  
し者とて銚につらぬきて高くさしあけ人々に見せて般若野のそ  
とはに釘付にこそしたりけれ (長)・其頸をば般若寺大鳥居の  
まへに釘づけにこそかけたりけれ 治承の合戦の時こゝにうた  
て伽藍をほろぼし給へるゆへなり (覚) ②⑥「見る人大仏をや  
き給はすハ今かゝるはちにあひ給へしや とてそしる者もあり  
涙をなかくす人もおほかりけり」アリ (盛)・「大佛をやき給  
はすハ今日かゝるめに相給へしや と申て涙をなかしける人も  
おほかりけり」アリ (長) ②⑦七ヶ日のあひたなら坂にありけ  
るを (盛)・頸をハ七日か程奈良坂ニかけたりけるを (長)・  
ナシ (覚) ②⑧北方大納言すけ内々春乗坊上人に付て さしも  
つミふかき人なれハ後のよをとふらは、やと思ひ侍り 衆徒を

もなため仰られて頸を返し給て孝養せん とうけこひけれハ上  
人あはれに覺してさま／＼に大衆をこしらへ申されて日野へを  
くりつかはす 北方大によるこひて即高野山にをくりてたうは  
をたて、追善をいとなみ給ひけり (盛)・春乗坊上人二大納言  
典侍殿三位中将のくひをこいうけ給て高野へをくり奉りたりけ  
り 北のかたの御心ノ中をしはかられて哀なり (長)・北方大  
納言佐殿かうべをこそはねられたりともむくろをばとりよせて  
孝養せんとて輿をむかへにつかはす (中略) 頸をば大仏の  
ひじり俊乗房にとかくの給へば大衆にこうて日野へぞつかはし  
ける 頸もむくろも煙になし骨をば高野へをくり墓をば日野に  
ぞせられける 北方もさまをかへかの後世菩提をとぶらはけれ  
るこそ哀なれ (覚) ②⑨かの春乗坊上人と申ハ左馬大夫季弘か  
孫右衛門大夫季能か息男 黒谷法然坊の弟子なり 慈悲ふかく  
して物をあはれミ上のたいこに蟄居し専うきよをいとひける程  
に (盛)・彼春乗坊の上人と申ハ左馬大夫季重カ孫右衛門大夫  
季能か子也 上醍醐法師にておハしけり (長)・ナシ (覚)  
③⑩東大寺造宮の大勧進に補られて一寺におもき人なりけれハ大  
納言のすけも此上人につけてこはれけれハ衆徒もそむきかたく  
してゆるしつかハしけるなり (盛)・東大寺造宮の勧進の上人  
也 なさけおハしましたけれハ三位中将の首をこいて北の方へ奉  
り給けるも慈悲のふかさも哀也 (長) ③⑪「つら／＼事の心を  
あんするに因果の道理はかけのことくかたちにしたかふ 善を  
しては天にむまれ悪をしてハふちに入といへり 重衡卿めつは  
うし月支東漸の仏教をやきうしなふ日域南北之靈陽 故冥衆不  
祐其人神祇成崇其身 生てハ恥を東國にふるひ死てハかはねを  
南都にさらす ましてならくのたき、のそこおもひやるこそむ  
さんなれ」アリ (盛)・「つら／＼事の心をあむするに重衡卿



(長)・ナシ(覚) ③東大興福兩寺の大衆宿老若輩かいかねをならして大佛殿の大庭に會合僉議あり わか大衆の僉議にいはく(盛)・大衆せんきしてけるハ(長)・南都の大衆うけて僉議す(覚)④「天竺震旦の法滅はしはらくさしをく (中略) 爰に故淨海入道惡逆之所催以而重衡為將軍盡園城三井之法水消南京二寺之惠灯 悲哉 最初成道一十六丈聖容必滅之烟聳蒼天之空 痛哉 法相三論八不唯識金言衰沒之露消春日錦營匪亡佛陀之教法專癡失淨侶之弘通 過守屋之違逆超調達之謗法 五刑之類比之猶輕五逆伴黨不可求外 衆徒多別亡君臣大愁歎 常住諸尊仏陀含恨護法善神成怒 故一門悉沈西海重衡獨為生虜 修因感果究竟彼卿寺邊にまはり来れり しかればはやく衆徒の手に」アリ(盛)・「重衡卿重犯の惡人なるうへ五刑のうちにももれたり 修因感果の道理究竟せり されハ」アリ(長)・「抑比重衡卿者大犯の惡人たるうへ三千五刑のうちにもれ修因感果の道理極上せり 佛敵法敵の逆臣なれば」アリ(覚) ⑤ナシ(盛・覚) ⑥ナシ(覚) ⑦兩寺の(盛) ⑧「を」アリ(長・覚) ⑨ナシ(覚) ⑩その、ち七か日かあひたに(盛)・て(覚) ⑪ほりくひかなふりきりにころすへき(盛)・のこごりにてやきるべき堀頸にやすべき(覚) ⑫とぞ申ける 若大衆は 尤しかるへし と同じけるを(盛)・と申けれハ(長)・と僉議す(覚) ⑬老僧の僉議にいはく(盛)・老僧せんきしていはく(長)・老僧どもの申されけるは(覚) ⑭「それも僧徒の法に穩便ならず」アリ(覚) ⑮重衡卿重犯事衆徒のせんきに同しくす 因果の道理まことに必然なり た、し彼卿治承に南都をほろほしし時(盛)・此重衡卿と云ハ治承の合戦の時法花寺の鳥居の前にうちたつて南都をほろほしたりし大將軍也 其時(長)・ナシ(覚) ⑯衆徒の

力をもてうちもと、めからめもとりたは刑罪せんきのむねにまかすへし(盛)・衆徒かうちもふせ切もふせてからめたらハこそこのこにてもきりほりくひにもしてなふりころさめ(長)・ナシ(覚) ⑰「まことに自業自得の所催彼卿死罪難遁歟 然者寺院のうちに入すして」アリ(盛) ⑱いつくにてもふしか切たらハ(盛)・た、いつくにても武士のきりたらん(長)・たゞ守護の武士にたうで木津の邊にてきらすべし(覚) ⑲首をうけとりてからんのできなれば奈良坂にかくへきなり(盛) ⑳とぞせんきしける 此條しかるへし(盛)・と僉議しけれハ尤々(長)・ナシ(覚) ㉑別につかひを相そへて重衡卿間事申送る 源二位家に仰奉り畢 た、し衆徒の手にうけとりて刑罪をおこなはん事そのは、かりあり(盛)・武士の方へ使者をつかハす(長)・武士の手へぞかへしける(覚) ㉒般若野より南へいれすしてあひはからはるへし くひをハ衆徒の中に給はつて一けんをくはふへし と返事したり(中略) 重衡かつミふかき者といふなれともまつたくミふか、らす 心よりおこつて南都をほろほしたらハ西海の波のそこにもしつミあつまの路頭にかはねをさらすへけれとも法相三論の学地邊花嚴法花修行のみきり仏法流布のさかひならの都にまはりきてきられて其後くひを東大興福寺にわたされん事大乘値遇の過去のえん淺からすと思へはつミふかかへしとも覺えすとの給へは (中略) 就中南都炎上の事王命といひ武命と云君につかへよにしたかふならひちから及はすまかりむかひ侍りぬ それに思はずに火出きたり 風はけしくしてからんの滅亡にをよふ それを重衡か所為とみな人の申し事い思ひあはすれハまことに侍りけり されはにや人ノもこそおほけれ一もんの中に我一人生とられて京かまぐらはちをさらしこれまてかはねをさらさん

様の原因に関する巷の風聞は、既に「重衡卿大路ヲ被渡<sup>サ</sup>事」の(口)の部分に写されていた。

又、一方、その言葉の中に出て来る重衡の述懐、南都を焼いたのは「心ナラス」ではあったが自分一人の罪となるのであろうということも、そのまま、その次の「重衡卿法然上人ニ相奉事」の(ハ)で繰り返されていた。

この重衡の述懐について、尾崎勇氏は

それ故、この部分も、女房の口をかりて、重衡の現在の必然を語るわけである。しかも、それでいて重衡の心情を代弁するという体裁をとることによって、焼失の暴挙が個人の発意ではなく、

(しかし、延慶本によるかぎり、重衡の発意によって焼失したと読みとれる。)部下の過失であるが、重衡はその責任者故自分一人が責任をとるという、極めてもったいぶったことになっている。それ故にこそ、重衡の生々しい人間性を率直にこのような他人の口を通して描き出しているのである。

と述べられている。<sup>(注1)</sup>確かに重衡の言葉には、「もったいぶった」、「往生際の悪い」ものがあるが、主旨は大仏を焼こうと意図した訳ではなかったということであろう。しかし、その罪は、当時の関係者の中で、重衡一人に集中してしまったように感じられた訳である。

先述のように、この述懐の内容は、(ハ)に共通するものであった。そこで注目されることは、いずれも確かな聞き手が認められるということである。従って、筆者は、この述懐は重衡の言葉として有名なものであったに違いないと思う。『平家物語』はそれをそのまま利用しただけなのだ。

「末ノ露本ノシツクナレハ」という論理には「重衡の生々しい人間性」が透けて見えるのかもしれないが、筆者は、そういう論理の下で、重衡が「奈良ヲ焼タル罪」を生きながらに感じたという事、及び、そ

の論理そのものに同感できた人間が少くなかったのではないかという事(享受者の問題)に重きを置きたい。

(ハ)本三位中將重衡卿南都へ下ルト聞ヘケレハ衆徒僉議シテ云<sup>1</sup> 此<sup>5</sup>  
重衡卿ヲ請取テ東大寺興福寺ノ大垣<sup>6</sup> 三度廻シテ後堀頸ニヤスヘキ<sup>7</sup>  
鋸ニテヤ可切ナントサマノ<sup>12</sup> 二議シケルニ宿老ノ僉議ニハ<sup>13</sup> 此<sup>14</sup>  
重衡卿ト云ハ去治承ノ合戦ニ法花寺ノ鳥居ノ前ニ打立テ南都ヲ滅タ<sup>16</sup>  
リシ大將軍也 其時衆徒ノ力ニテ打モ伏セ射モ止テ擲取タラハ尤左<sup>17</sup>  
様ニモシテナフリ可殺<sup>18</sup> (中略) 只何ニモ武士カ手ニテ切タラ<sup>20</sup>  
ハ頸ヲハ請取テ伽藍ノ御敵ナレハ奈良坂ニ可係ト僉議一同ナリケレ<sup>21</sup>  
ハ尤モ可然トテ衆徒ノ中ヨリ使者ヲ立テ重衡卿ヲハ般若寺ヨリ内へ<sup>22</sup>  
不入只何ニテモ可切 伽藍ノ怨敵ナレハ首ヲハ請取ヘシ ト申タリ<sup>23</sup>  
ケレハ (中略) 中將ノ首ヲハ<sup>24</sup> 南都ノ衆徒ノ中ヘ送リタリケレ<sup>25</sup>  
ハ大衆請取テ東大寺興福寺ノ大垣ヲ三度引廻テ法花寺ノ鳥居ノ前ニ<sup>26</sup>  
テ鉦ニ貫テ高ク指上テ人ニ見セテ般若寺ノ大卒都婆ニ針付ニソシタ<sup>27</sup>  
リケル<sup>28</sup> 首ハ七日カ程ハ有ケルヲ北方春乗房上人ニ乞請給テ高<sup>29</sup>  
野山ヘ送給テケリ (中略) 彼春乗房上人ト申ハ右馬大夫季重孫<sup>30</sup>  
右衛門大夫季能也 上西西法師也 東大寺造營ノ勸進ノ上人ニテ<sup>31</sup>  
オワシケレハ三位中將ノ首ヲモ北方ヘ奉リニケリ 權者ニテオワシ<sup>31</sup>  
ケレハ慈悲モ深クオワシケルニヤ

(第六本<sup>36</sup> 重衡卿被切事ノ三十七 北方重衡ノ教養シ給事)  
校異①中將(盛)・ナシ(覚) ②いつミの小津につき給へは土肥

二良南都へ使者をたて、いはく 三位中將重衡をハ関東にして  
かうへをはねらるへしといへとも南都兩寺をほろほすとかによ  
りて衆徒の手にわたしつかはす源二位家の下知にまかせて寺邊  
に發向くそくすへし 寺内にいる、か境外にをいてうけとるへ  
きか と申たりけれハ(盛)・奈良へわたされ候と聞えけれハ

## 「治承物語」をめぐる試考

延慶本『平家物語』の東大寺

「伽藍ノ罰」 関係記事――

橋口 晋作

拙稿「平家物語における三島明神と春日明神——延慶本『平家物語』

・『源平盛衰記』と覚一本『平家物語』との対照を中心に――(注二)にお

ける平清盛の死去の場面についての指摘を受けて、前稿(一)の第一章

では、まず、延慶本の第三十三<sup>本</sup>「大政入道他界事<sup>付録々ノ概異共有事</sup>」から「金

銅十六丈ノ廬舎那仏ヲ奉<sup>リ</sup>焼給タル伽藍ノ罰」に關わる部分を抜き出

して、それを、源平盛衰記・長門本・四部合戦状本・覚一本と比べな

がら、考察することを試みた。その結果、それらの部分は二種類に分

けられることが考えられたのであるが、筆者は、それら「伽藍ノ罰」

を眼目とする記事を「治承物語」に擬してみようとしたのである。

次いで、第二章では「治承物語」が『平家物語』に拡散して行った

事情を考えてみるという方向で、東大寺を焼いた平家軍の大將、重衡

に関する記事を取り上げ、それらについて考察を加えつつあった。従

て、本稿は、前稿(一)を受けて、その第二章の途中、(へ)から始め

るべきものである。ところが、前稿の校正の折、掲出の前後違いや挙

げ落としがあることに気付いたので、ここでその補訂を行い、かつ、

その続きのところにも手を入れることにしたのでお許しを乞う。

掲出の前後違いというのは、第二章で掲出した部分のイ)とロ)とが入

れ違っていたことである。延慶本に出て来る順に掲出しているので、

第五<sup>末</sup>一の(口)が先でなければならなかった。

挙げ落としたというのは、第二章で、三番目に、(ハ)として次の部分を掲出すべきだったことである。

(延)人×シ×モ×コ×ソ×ア×レ×  
 (盛)人×シ×モ×コ×ソ×ア×レ×  
 三位ノ中將ノ生ナカラ  
 被取テミヤコノ大路ヲ

多一門人々中  
 くらもある人のなかに  
 いもあな  
 しもいけとりにせ  
 られ  
 ×  
 ×  
 ×  
 ×

度×ル×事×悲×シ×サ×ヨ×人×ハ×皆×奈×良×ヲ×焼×タ×ル×罪×ノ×報×ヒ×ニ×ヤ×ト×云×也×ケ×ニ×

は、  
る  
  
ら  
×  
××  
××  
××ん  
皆  
人  
  
亡  
×  
  
× ×  
× ×  
申  
あへり  
なる  
××  
××

×  
×  
×  
×  
×  
×  
×  
×  
上×  
×  
×  
  
口×  
好×  
×  
重×  
ノ×  
二×  
ハ×

哉  
心  
ニよ  
毛り  
發  
ヲ  
スぬ  
堯

モサヤラムト  
おほゆる  
是ニテ  
中將ノ宣シ  
手小ニ  
發シテ  
戒

事	×
な	×
い	×
く	×
く	×
く	×
く	もさそいひし
日本第一の	>ないーい
大からんを	

ケトモ云サリシカトモ多勢ナリシカハ心ナラス火ヲ出シタレハ

か×  
不  
ね下  
知  
惡惡  
黨黨  
おほ  
か多  
り  
手々  
に  
はな  
て

やきほろほしたれは  
 多ノ伽藍減給又  
 末ノ露本ノシツク  
 ナレハ誠ニ我罪ニコ  
 にかへりつ人にすくれてつ

風劇堂舎 塔廟焼矢 事  
堂塔をやきはらふ

ミ  
ふ  
か  
く  
こ  
そ  
あ  
ら  
ん  
す  
れ  
力  
(中略)  
ケ×  
二×  
毛×  
サ×  
ト×  
オ×  
ホ×  
ユ×  
ル×  
ノ×  
ヤ×

人しもこそ

[illegible]

まきこは主ながらとられて京の町をさらすことのむづさよ

（第五<sup>末</sup>四）重衡卿内裏ヨリ迎女房事

これは、以前文を通わしていた内裏の女房が、重衡が都へ引き立て